第1章　草創期　日本バドミントン普及の先駆者

年 表

1937年（昭和12年）横浜ＹＭＣＡ主事広田兼敏氏が欧州の体育施設視察帰朝直後、日本で初めて、横浜ＹＭＣＡ体育部に「バドミントン」を組み入れる。

1939年（昭和14年）7月横浜ＹＭＣＡにバドミントンクラブ結成。兵藤、佐藤、山本、仲地が慶大より入部。

1941年（昭和16年）三田山上、万来社前広場に小泉塾長を招き「バドミントン」を披露する。
4月慶応義塾バドミントンクラブ誕生、第１回部員募集を行う。
部長　寺尾 琢磨

1942年（昭和17年）10月東京ＹＭＣＡで創立総会を開き創部する。
部長　寺尾 琢磨、主将　山本 孝二

1946年（昭和21年）戦後初の部員募集を行い、横浜平楽小学校に於て初の練習開始。

1947年（昭和22年）バドミントンクラブ塾内対抗競技部に加盟。寺尾部長が関東学生バドミントン連盟会長に就任、奥井部長が２代目部長となる。
10月関東学生バドミントン連盟発足。
加盟校―慶応、明治、立教
初代会長　寺尾 琢磨　　初代委員長　六角 勉
第1回関東大学リーグ開催。優勝慶応　２位明治　３位立教。

1948年（昭和23年）1月第1回東京都民大会開催。シングルス優勝広田　２位藤井。
5月第1回全日本バドミントン選手権大会開催。ダブルス広田、藤井組優勝。

1949年（昭和24年）10月第４回国民体育大会にバドミントン正式種目となる。
シングルス優勝広田　２位佐藤　３位藤井。ダブルス優勝藤井、広田組。
11月第1回合宿葉山で行う。
三田バドミントンクラブ（ＭＢＣ）結成　クラブ員21名

1950年（昭和25年）体育会にバドミントン部として正式加盟。
9月第1回関西遠征を行い、全関西学連選抜軍と対戦。6：0、7：2で完勝。
11月全日本学生バドミントン連盟誕生。会長　奥井 復太郎
11月第1回全日本学生バドミントン選手権大会開催。
シングルス優勝広田、２位藤井、ダブルス優勝広田・小宮組、２位藤井・前田組

概　説

昭和の初め、日本で「バドミントン」というスポーツがはじめて横浜で生れ、本格的にスポーツとして発展したのは、1940年（昭和15年）以降ですが、慶応の学生はそれ以前の昭和1939年（昭和14年）より、「バドミントン」の発展にまた其の主軸となって活躍し、3年後1942年（昭和17年）に全国に魁がけて、母校慶応に部を創り、戦前の発展と、戦後は日本バドミントン協会の設立時の役員として、又関東学生連盟、全日本学生連盟の創設に尽力し、今日の「バドミントン」界の発展に名実共に其の礎を築いたものです。

日本の「バドミントン」は横浜ＹＭＣＡの広田兼敏さん（28年卒・広田秀敏君の父）努力に依って横浜ＹＭＣＡで発足し、発展したものです。広田さんが1936年（昭和11年）7月欧州に渡り、ベルリンオリンピック大会並びに其の後欧州各国の体育視察、特にデンマークのオレロップ体育大学で、デンマーク体操、バドミントンを学び、帰朝した翌年の1937年（昭和12年）6月より横浜ＹＭＣＡ体育部に週3回の練習時間を設けてからです。

翌1938年（昭和13年）の第1回横浜ＹＭＣＡバドミントン大会に兵藤昌彦（三田バドミントンクラブ顧問）が出場した記録が残っています。

それでは其の頃他で「バドミントン」をやっていたのは日本国内を見ても

（イ）1868年（明治元年）に創立された横浜、山手の外人クラブ（ＹＣＡＣ）が、1933年（昭和8年）より神戸の外人クラブ（ＫＲＡＣ）との間で交換親善試合を始めて居り、ＹＣＡＣは戦前の慶応の良き試合相手でした。

（ロ）岡　善七氏（30年卒・岡道明さんの父）がスポーツ用具製造会社として1930年（昭和5年）に横浜に設立した「ナルトスポーツ」の社内コートで社員がバドミントンをやっていた。

丁度この頃、1939年（昭和14年）4月に慶応に入学し、横浜ＹＭＣＡの寄宿舎に入った、佐藤、山本、そして加賀（旧姓仲地）の諸氏が加わり、その後吹野、六角両氏が加わったわけです。

以上の経過で慶応に1942年（昭和17年）に部が出来たことを、広田兼敏さんが手記に次の様に述べています。

日本に「バドミントン」を普及させるのは、学生がはや道と考へ、慶応に部を創ることをすゝめ、1942年、昭和17年4月に東京ＹＭＣＡの柳田主事に頼み、慶応の東京勢の為に「バドミントン」の白線を鮮かに引かせ、横浜、東京に分かれて慶応の練習が開始されたことは、なによりの慶びと、待望の夢が実現された。

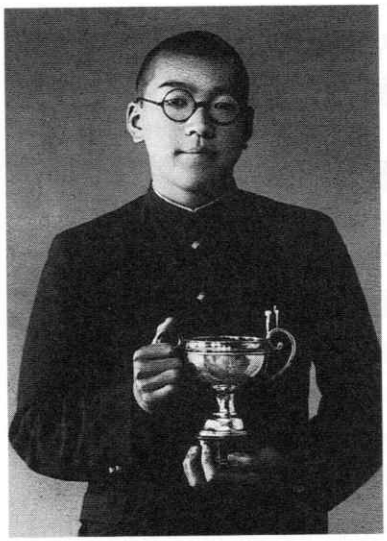
戦後慶応がいち早く練習を開始し、1947年（昭和22年）塾内対抗競技部に加盟した。同年、関東学生連盟、そして1950年（昭和25年）に全日本学生連盟の結成を早めると同時にバドミントンが日本中に広がっていく基礎を作ったと言っても過言ではない。

関東学生リーグ戦に於ては結成以来1950年（昭和25年）まで毎回、又1950年の第1回全日本学生選手権大会でも慶応は優勝した特に藤井（光）・広田両君の活躍は輝かしいものです。

（六角　記）

初優勝など思いつくままに

佐藤　保（昭和19年卒）



初優勝！スポーツマンにとってこれ程素晴らしいことはないと思います。他人にはとるに足りない優勝であっても本人の私にとってはその60年後でも強烈な印象として心に残っているものです。殊に私にとり小中学生時代を通じて優勝には程遠いスポーツ歴であっただけにバドミントンで優勝できたことは一生忘れられないのでしょう。思えば昭和14年両親から離れて北海中学から慶応に進学し横浜ＹＭＣＡアパートに入居し初めてバドミントンというスポーツに出会いました。折しもここに大阪北野中学から山本孝二君、満州国（現中国東北部）からの留学生寿祝嵩の両君も慶応入学とともに入居して来て、いうとはなしにバドミントンという珍しいスポーツを楽しむことになったのです。当時山本孝二君はクラシック音楽鑑賞の大家、寿君は専ら宝塚少女歌劇の大ファン（私も一度見に行きましたが、具合悪くなりやめた。）でありました。私の人間形成にとってＹＭＣＡと山本君の感化は著しいものがありました。そして共通のスポーツとして３人は私の学徒出陣の1943年（昭和18年）12月（ＹＭＣＡから松本東部50部隊へ入隊）までエンジョイすることができました。最初は羽根付きくらいと思っていましたがＹＭＣＡの体育主事であった広田兼敏先生から本格的バドミントンの技術を指導していただき、こんなにきついスポーツと思い知らされました。先生は遠隔地から来た至らぬ私を殊の外可愛がってくれ私のバドミントンで戦前戦後を通じて数々の優勝歴も第一には先生のお蔭でありご恩の程今でも感謝に堪えないところであります。さて前おきが大分長くなりましたが、バドミントンでの初優勝は1940年（昭和15年）３月、当時ＹＭＣＡの部内大会でした。学生は私共慶応の学生３人で後は会員のサラリーマンの方が多数参加されたと記憶しています。ＹＭＣＡに貢献された秋田さんのカップ争奪戦でした。苦戦の連続だった優勝だけに嬉しさの余り札幌の両親へ電話した程でしたが、当時北海道ではバドミントンは未知のスポーツで理解して貰えなかったようでした。翌日は近くの写真館へカップ持参のうえ学生服で記念写真をとったが、今でも懐かしさ一杯というところです。初めは山本孝二君に頼みたかった（彼はライカカメラを持っていておどろいた）が勝

たせてもらったので言い出せなかったことを憶えています。残念ながら彼は早くにこの世を去ってしまったが、長く私のパートナーで活躍してくれた仲地君(現姓加賀)と彼の妹陽子さんが結婚された関係で昨年も札幌で旧交をあたため彼を偲び合いました。今札幌はお盆のとき、山本孝二君と同級生でバドミントン界の大功労者森友徳兵衛君や諸岡良幸君と恩師広田兼敏先生のご冥福を心からお祈りする次第です。今や加賀幹雄君も私も古希を越えました。いつの日か天国で我ら慶応OBと広田先生を交えてバドミントンをやりたいと念願しています。最後にOBとして後輩諸君に一言「日本バドミントンのパイオニアであることを認識され往年のように学生、いや日本バドミントン界に君臨する日を望んで止みません。」

以上

創立50周年に際して

加賀　幹雄（昭和19年卒）

我が慶応バドミントン部創立50周年を迎えるに当り、部の誕生時から今日まで、その成長の姿を見守ってきた私にとって、50年の年月は、我が部だけでなく、日本のバドミントンの歴史そのものであり、感慨深いものがあります。また、部の発展に尽くして下さった歴代部長、友人、そして後継者の人に深く感謝いたします。

大河の源流は小さな泉の湧水であるように、我々の部の源流は1939年（昭和14年）横浜ＹＭＣＡの体育館と言えます。当時ＹＭの寄宿舎に居住していた予科の新入生、山本孝二、佐藤保、寿さん、それに市内に在住していた私の４名が、ＹＭの体育主事をしておられた広田兼敏氏の指導により、全く未知のスポーツであったバドミントンのラケットを握ることになった。先輩であり、後日慶応の体育教授となられた兵藤さんは、我々の数年前からプレーしていた。すなわち、ＹＭＣＡの体育館で我が部、更に日本のバドミントンが誕生したと言えます。その後、我々はＹＭＣＡのメンバーとして、当時県下にあったコロンビア、古河電線、ナルトスポーツとリーグ戦を行い、外国人の体育団体であるＹＣＡＣともプレーした。

1940年（昭和15年）、1941年（昭和16年）には森友、諸岡両君それに同級生数名も参加して、バドミントンの流れは小川になり、1942年（昭和17年）六角君が新入生として部員募集に応じて参加し、ここに

慶応バドミントン部として正式に第1歩を踏み出した。
しかし、当時第2次世界大戦は我が国も参戦し、激化し、1943年（昭和18年）10月に学徒動員となり、殆どが陸海軍に分かれて兵役にとられ、ここにバドミントンの歴史は中断されることとなった。

大戦は1945年（昭和20年）8月日本の降服によって終結し、部員も逐次復員してきたが、山本君は大阪、佐藤君は北海道、森友・諸岡両君そして私も卒業して東京で就職していた。

その頃終戦直後は食生活は不自由で、生きることがやっとで、スポーツどころではなかった。この焼跡の中で、現役として活動を開始したのが六角君で、森友の弟に呼びかけて、広田氏の協力もあって、平楽小学校の雨天体操場を借りて練習を開始した。2人の努力によって部員も集まり、この現役連中によって第1期の慶応バドミントン部の黄金時代を迎えることとなった。

戦後のバドミントンの歴史の1頁もまた、我が部によって開かれたと言ってよい。1950年（昭和25年）（故森友君の手記には昭和24年としているが、正確には25年である）の春は私が大阪へ転勤するまで、初代監督として天現寺の幼稚舎の体育館で練習したのも今は懐かしい思い出である。

その後も慶応の最強時代は続くが、立教、法政、早稲田そして関東学院と逐次大学が部を作り、且つ実力もつけ、高校更には、社会人の間にも普及し、我が部は成長した大河の中に呑み込まれ、現在は残念ながら2部に低迷している。理由はいろいろあるであろうが、私が1969年（昭和44年）横浜へ帰ってきた時、三田バドミントンクラブの総会に出席して、現役の現状、又財政面の問題を知り驚いた次第です。その後小宮会長外役員の努力、他数々のOB達の協力で逐次改善されて来ており、監督の指導による現役の実力向上も各シリーズのリーグ戦の報告に期待しています。

バドミントンも1992年のバルセロナオリンピックには正式種目となった。ここまでこのスポーツが成長するとは50年前の部創立当時には想像もつかなかった。

日本のバドミントンの今日の発展の源流としての栄光の歴史を想起し、ただ古いことのみを誇りとするのではなく、日本のバドミントン界をリードする慶応バドミントン部であることを祈念しています。

回　想

吹野　家寿吉（昭和21年卒）

慶応義塾バドミントン部が創立50年を迎えたことは、誠に感慨無量であります。僕の70年の人生で当部と50年の関わりを持った事は、生涯の誇りであり且つ又今までにいろいろと御指導頂いた部長先生、及びOB会の皆様に感謝申し上げます。

創部1942年と言えば、その前年12月8日に既に大東亜戦争に突入して居り、戦時色一色の時代であった訳です。翌'43年（昭和18年）4月には大学令改正に基づき、予科の修行年限を1年短縮し、2年に改正され9月には理工学系以外の学生徴兵猶予撤廃され、10月21日には文部省主催、学徒出陣壮行会が挙行され、11月には三田山上で塾生出陣壮行会が行われ、小泉信三塾長より「国家存亡の際各自の両親兄弟を守る為に、ペンを銃に持ちかえて戦場におもむけ」と励まされ、あの思い出の図書館前に教授、塾員、塾生が整列した前を出陣する我々が行進して幻の門を通っていった訳です。そして、12月1日には各々海軍、陸軍、空軍へと入隊しました。

1945年（昭和20年）8月5日、敗戦宣言、「国敗れて山河在り」と云うが9月に三田山上に来て見れば、大ホールも図書館も焼失して2年前の記憶にあった状況とは一変していました。山上には学生服姿は殆んど無く、軍隊の将校服や航空隊のジャンパー姿が目立ち、如何にも戦争直後だなあと感じたものです。9月に復学し学生生活を1年過ごしましたが、当時の食料事情ではスポーツ等は考えも及ばぬ状況で先ず食べる事、次いで新円（預金封鎖で旧円使用禁止）かせぎのためのアルバイトで過ごし'46年（昭和21年）9月卒業10月に社会人になった訳です。

時来1980年（昭和55年）3月、㈱守谷商会を退職するまで、地方に一度も転勤すること無く過ごした事が幸か不幸か当部の面倒を見ることになった訳です。'59年（昭和34年）3月、豊場君の卒業時に監督を岡君に托し、森友先輩が日本バドミントン協会の役員に専念するためOB会長を辞任された為OB会長を引き受け20年会長をやり、'79年（昭和54年）6月OB会長を小宮氏に引き継いで頂きやっと肩の荷を降した気分になった様な次第です。

其の後'84年（昭和59年）9月に五月女君が主将として活躍していたときに日吉の体育館に夏合宿の最終日の練習を見に行ったときから

再び現役諸君との交流が始まり日吉の練習や志村のリーグ戦等を見て苦言を呈している次第です。

'54年（昭和29年）1月朝倉主将のとき監督になり岡、吉原、石田、江井、豊場と5年間はリーグ戦では一部上位にランクされ成績は心配せずに過ごした次第です。然し全日本学生選手権大会では京都で行われた昭和29年対立教との決勝戦で2勝し乍ら逆転されて敗れたことは今でもはっきりと記憶に残って居ります。爾来5年間ついに優勝出来ず2位に甘んじてしまいました。それが今でも残念で仕方ありません。個人戦ではダブルスで昭和29年岡・越川組30年石田・越川組が優勝、32年には越川・豊場組が3位とそれぞれ立派な成績を示してくれました。当時は参加校も少なく関東学生リーグ一部校の立教、慶応、明治、法政等がトップレベルを構成して居りトーマス杯代表選手として、第3回は岡君第4回に越川君が選ばれて出場しています。大学部員も4学年男女合計で30名～40名が常時在籍し高校生と一緒に行った松本の合宿等は80名にもなった覚えがあります。各学年でそれぞれ特色がありましたが纏りの良かったのは昭和32年度卒業生と昭和34年卒業の年度は部の運営にも積極的に全員で協力して呉れたことを記憶しています。その後もOB会の運営にはそれぞれ多年に亙り尽力されている事は皆様の良く知るところであります。いづれにしても当時の皆様にお会いするとやはり若き日の思い出につい夢中になる有様です。両学年が年1回の会合を10回クラブの名称で開催されていますがいつも楽しく過ごさせて頂いています。

当時の話はいくらでも思い出としておりますが今回の50年を良い機会に、更に次の100年に渡って伝統ある部として100年祭を迎えることを願って居ります。然し次の50年のあいだは平和であり2度と学業を半ばで学徒出陣と云うような事は絶対にあってはならない事であります。今後とも現役諸君の健闘と努力を期待して筆を擱きます。

学連誕生について

六角　勉（昭和24年卒）

1949年（昭和22年）10月4日に発足した「関東学生バドミントン連盟」は、我国バドミントン界に於る最初の「学連組織」であります。場所は東京富士見町に当時あった東京ＹＭＣＡで、此の時連盟発足の第1回総会を開き、慶応、明治、立教の三大学で発足し、初代委員長

に私が推されたのです。私が戦後昭和21年春に、慶応のバドミントン部を再興し、横浜にて練習を再開した翌年に、「東京バドミントンクラブ」を主宰していた宮沢宏之氏より、前記2校が練習を始めた由の連絡を受け、明治の梶間悟郎君、立教の鷲塚圭司君に会い、学連誕生になった訳である。翌昭和23年秋に法政が東京、御徒町駅の近くの小学校にて練習を始めたので、中野君に連盟加入を願い、関東学連の母体が、慶、明、立、法の四大学になった訳であります。

昭和25年に当時私が役員をやっていた、日本バドミントン協会より何んとか全国の学連をまとめてほしいとの要請があり、丁度此の時慶応が関西に遠征した関西学院大学の大圃秀生君が、関西学生バドミントン連盟を発足させる気運も生じて来たので、愈々全学連へと進んだ訳であります。書店で求めた全国学校便覧を頼よりに、北は室蘭工業大学から南は鹿児島大学まで約60～70校宛に案内状を発送したのです。其の内容は、「全日本学生バドミントン連盟を結成するので、もしバドミントンをやっていたら、是非参加してほしい」旨の手紙であった。私は前年の昭和24年に慶応を卒業していたので、勤務先の会社を連絡場所として、爾後各大学と連絡をとっていたので、「革新全学連」結成と間違えられ、東京三田警察より調べを受ける笑えぬ話もありました。やっとのことで約20校が全国より参集し、昭和25年11月23日東京ＹＭＣＡに於て第1回の結成総会を開き、翌日より全日本バドミントン選手権大会を、横浜東神奈川にあった、神奈川体育館（現在の神奈川アイススケート場）にて開催することが出来たのです。参加選手は約20校・100名・コート4面を使用し、２日間の大会を無事終了したのです。当時は戦後間も無いことで、交通事情も悪く、特に食料事情も悪い時に、各校が全国より集ったことは、学生ならばこその快挙でした。猶此の大会にても慶応が総てのタイトルを独占したことも申し添えておきます。

此の様に関東学連次に全学連へと結成が進んだことが、今日の日本バドミントン界の基礎を作り、学生が其の底辺を広げ、各県の協会結成並びに実業団発足等バドミントン普及に絶大なる寄与をしたことは明白なことです。

広田兼敏先生について

六角　勉（昭和24年卒）

当時横浜ＹＭＣＡ体育事業部に奉職していた、先生は昭和11年７月欧州に渡り、ベルリンオリンピック大会、並びに各国の体育事情を視察し、特にデンマークのオレロップ体育大学で、デンマーク体操、バドミントンを学び帰国した翌年の昭和12年６月より、かねてからの念願のバドミントン、フェンシング、デンマーク体操を正式に体育科目として取入れ、日本でのバドミントン普及の祖となったのです。慶応とのかかわりに就いてのみ記しますと、御承知のとおり昭和14年４月に横浜ＹＭＣＡの寄宿舎に入った、佐藤、山本、寿、加賀氏を指導して、初の大学バドミントン部を創る基をつくったのです。従って戦前の慶応の対外試合の写真にも、ほとんど先生の姿が見られます。戦後私が部の再建を図った昭和21年のときも、真っ先に先生を訪ね協力を得て、日本で戦後初めての組織的活動を、先生の自宅前の、横浜山手、平楽小学校で始めることが出来たのです。同年6月より横浜ＹＭＣＡが現在の横浜中華街の入口にある、港中学の体育館で体育事業を再開すると共に、慶応の部の本拠地もここに移り、先生との密接な関係が再開されたのです。翌昭和22年関東学連誕生のときも、先生に頼み東京ＹＭＣＡの1室を借り、学連を結成し、25年全学連を創ったときも、総会の場として東京ＹＭＣＡ、試合会場として、神奈川体育館を借りて戴き、無事１同の結成行事を終了することが出来たのです。一方では先生の訓導を受けた部の塾員が日本バドミントン協会の本部、支部の役員となり、日本バドミントン界の発展に先生と共に深く寄与したことは、枚挙にいとまがありません。

先生は明治32年、札幌に於て生を受け、大正８年６月、横浜ＹＭＣＡ体育事業部に奉職して以来、日本の室内運動としての、バドミントン、バレーボール、機械体操、バスケット、フェンシング、デンマーク体操等の指導を一貫して行い、各協会の役員として、其の発展に尽し、横浜文化賞、文部大臣賞を受け、昭和56年１月、81才で没するまで、情熱をスポーツに注いだのです。

最近先生の自筆の記録、厚さ10センチ、部数11巻を１カ月費して見たとき、先生の偉大さを痛感すると共に、慶応として良き指導を常に賜ったことに、深大なる謝意を表したいと思います。

戦後のバドミントン部活動再開の頃

三ッ橋　公夫（昭和24年卒）

バドミントン部創立50周年、誠にお目出とう御座居ます。……と最初にお祝いの言葉を申し上げる一方で、その50年の歴史の重さと誇りに満足するだけでなく、更に発展を、いや先づは過去の栄光を取り戻すために、OB諸兄、現役諸君の奮起をお願いしたい気持ちで一杯です。

私がバドミントンを始めたのは終戦の翌年即ち昭和21年春の復学の時でした。既に、予科時代にバドミントンを始めていた六角君の熱心な勧誘によるものでしたが物資欠乏の頂点にあった頃ですから、シャトルコックは言うに及ばず、ネット、クラブなど満足なものは入手するのも困難で大変な苦労をしたものです。また練習をするにも適当な屋内体育館施設が少なく、創部時の先輩も皆卒業して了ったこの21年からの部活動再開には六角君が最大の苦労を味わったのではないかと思います。幸いにして2人、共に横浜在住でしたから、別表記載のバドミントンの歴史の中に詳しく述べられている横浜ＹＭＣＡ体育主事をして居られた広田兼敏氏（28年卒OB広田敏秀君父君）に練習場も含めて大変御世話になったものです。然し学部に入ってから入部した小生と異り、予科入学以来の部員であった六角君の部活動再開にかける熱意は凄じく、先づは部員の勧誘から資材の手配、練習場、試合場の確保の交渉等実に小まめに動いて居ったのを想い出します。時には暗い裸電球の下で、シャトルコックの傷んだ羽根を抜いて鶏の一番太そうな羽根を糊で植えて見たり（これはとても実用に供するものではないことは一旦試して見れば氷解するのですが）、時には市販のセルロイドの下敷を羽根の大きさに切抜いて鋏で多数のギザギザを切込んで植え込んで見るなど、物の豊かな今の時代には想像も出来ないようなことを試してみたりしてシャトルコック入手難を乗り切ろうと努力したものです。又練習の為に借りた焼け残りの小学校の体育館では、殆ど爆弾で吹きとんだガラス窓から風や雨が吹き込んで、条件の良い日を除いてはまともな練習も出来なかったりしたのも、今となっては懐かしい想い出です。

私自身は学業の他に1日おきの進駐軍の仕事を持っていた関係上、部活動には自から制約があり、部の為に大きな貢献をするに至りませんでしたが、六角君の熱意に促されて彼をアシスト出来たことを喜ん

でおります。このような状況の下で1～2年を経過するうちに、部員も徐々に増加し、又日本のバドミントン界の組織も整備されて学生バドミントン協会や日本バドミントン協会の主催する大会に当部の藤井光男君や広田敏秀君が、更に岡道明君などが常に賑やかに優勝を飾るようになり慶応バドミントン部の第1期黄金時代へと進んで行ったのです。

振り返ると、戦後のこの厳しい時代に総て経済的には自己負担で部の再建と発展に努めてきたわけで、諸先輩や同僚達の此の努力があってこそ得られた栄光だと思います。どうか現役の諸君等も此の時代の先輩達に想いを馳せて頑張ってほしいと願うものです。

わたしとKEIOのバドミントン

イスマイル・アブカシム（ISMAIL ABKASIM）（昭和26年留学生）

私はインドネシアにいた時からバドミントンをやっていました。日本へは、勉強の為やって来て、まず国際学友会に入り1年間程日本語の勉強をしていました。その時日本にバドミントンがあるとは思っていませんでした。最初に新宿でKEIOの学校のバドミントンの試合を見ました。一緒にプレーしたいと思ったのですが、学生でなかったのでプレーも練習も出来ませんでした。練習出来るためにやっぱり学生にならないといけないと思い、一生懸命努力することにしました。広田さんのお父さんにさそわれて、横浜のＹＭＣＡのメンバーにもなり、そこでの練習に参加出来ました。私の記憶では、藤井（光）さんと広田さんが一番目立ったテクニッシャンだったように思います。

私は小宮さんとはじめてのダブルスのコンビを組んだのを憶えています。岡さん、佐藤さんがとてもおもしろいコンビでしたし、広田さん藤井さんが一番強いコンビだったように思います。それから佐藤先輩の招待で北海道へ試合に行きました。そのついでに3日ほど札幌を見学したり、方々へ行ったのをなつかしく憶えています。とっても寒かったけれど、とても面白かったです。私は約2～2.5年、KEIOにいて、父の病気のためインドネシアに帰国しました。それからはずーっとえび、まぐろなど魚関係の会社の仕事をしています。

今歳をとりましたが、若いときすばらしい日本の学校で、すばらし

いバドミントンの友人と暮らせたことを時々感謝しています。
DIRGAHAJUKEIOBADMINTONCLUB50TAHUN1442-1992.
（慶応義塾体育会バドミントン部1942年より92年までの50周年おめでとうございます。これからも幸あらんことを祈ります。の意のインドネシア語）